

COVID-19 感染対策から地域づくり

出雲保健所 所長 中 本 稔

COVID-19 は人と人の関係性を問いました。飛沫感染・接触感染を予防するために、ソーシャル・ディスタンス（社会的な距離）を保とうというスローガンが使われていますが、大事なのはフィジカル・ディスタンス（身体的な距離）であって、ソーシャル・サポート（支援）やソーシャル・キャピタル（信頼関係）は近づけなければいけません。ソーシャル・ディスタンスは関係性まで警戒させてしまう過剰な呼びかけだということを知ってほしいと思います。

フィジカル・ディスタンスで飛沫感染は予防できます。しかし、学校で子ども同士が接触をしないと、エアロゾルをなくすということは不可能です。窓を開けて室内の空気の流れをつくるだけでもエアロゾルが減ると推測されます。0（ゼロ）をめざすのではなく、体内に入り込むウイルスをどう減らすかが大事です。

ウイルスは見えません。正しい知識をもつことで、このあたりにウイルスが存在するかもしれないと「見えて」きます（心眼？）。マスクをする、後で手洗いをする、を守れば近づくことができます。風評ではなく正しい知識を得る能力を身につけること、加えて、知識を生活や実際の感染予防に活用するには、技術が必要です。知識や技術を手に入れるには、一人では限界があります。信頼できる人がいる、心配する・される大切な人がいる関係性が大事です。学校現場では知識を得るだけではなく他者とどう関係をつくるか、生涯の友と出会うことも大事で、子どもも関係者も苦労が絶えないと想像しています。

敵はウイルスです。適切な対応をすれば感染するリスクを減らすことができます。しかし、適切な対応をしていないからと言って、感染した人を悪者扱いしないことが大事です。なぜなら、どんなに予防しようが0（ゼロ）リスクにはならない、見つかる前に COVID-19 は広がっているのです。

感染したと分かった段階で別の人に感染させない努力をする。保健所では、感染者が出ることとその濃厚接触者から患者が発生することは仕方ないが、次の感染を起こしてクラスターが大きくなることは防ぎたいと考えています。

OECD加盟国中、日本の子ども貧困率は高いことが知られています。表はEUが子どもの貧困の指標にしている剥奪指標です。単に世帯の所得の議論だけではない、親自身が健康で文化的な人生を送っているのかが問われるものです。子どもの貧困を防ぎながら COVID-19 感染対策を進めることが、大人の大きな責務です。

貧困を減らすには、すべての子どもに生きる力を身につけていただきたい。筑波大学の斎藤環先生は「リスクを負う権利、リスクに向かう尊厳」を紹介しています。仮に弱点や障がいがあっても、正しい知識と技術でリスクに立ち向かい、失敗しても立ち直れる社会をめざしたいと。

我が事として考えて応援したい。感染した人を悪者にするのではなくて再出発するために暖かく応援したい。治療を行っている医療者には、がんばれと声援を送りたい。そういう声が聞こえる地域になることを願って、関係者の皆様と感染症対策を進めていきたいと考えています。

表. 1歳以上15歳以下の子供を対象とする子供の剥奪指標

- 1) 野菜・果物を1日1回摂取
- 2) 肉・魚又は相当するたんぱく質を1日1回摂取
- 3) 勉強や宿題をするのにふさわしい場所がある
- 4) 家で十分な暖が取れる
- 5) 古くなった家具の買い替えができる
- 6) 新しい服がある(中古品は含まない)
- 7) ぴったりの寸法の靴が2足(1足は全天候型)ある
- 8) 自家用車がある
- 9) 費用のかかる学校の遠足や活動に参加する
- 10) 年齢にふさわしい書籍を持っている
- 11) 屋外でのレジャー用具を持っている
- 12) 屋内用のゲームを持っている
- 13) 定期的なレジャー活動を行う
- 14) 家にPCと自分用のインターネット接続がある
- 15) 1年に最低1週間、家を離れて休暇を過ごす
- 16) 遊びや食事のために時々子供を家によぶ
- 17) 特別なときのお祝いをする
- 18) 住宅ローン、家賃、公共料金、分割払いの滞納がない

出典) EU ヨーロッパ2020戦略の「貧困と社会的排除の基準」
(内閣府「子供の貧困対策 平成28年度子供の貧困に関する新たな指標の開発に向けた調査研究報告書」から)